長崎県教職員組合

障害児教育部だより　いっぽ(*^^*)

『こどもたちは みんな多様な中で学びあう』号

2024.3.16

2024 年 2 月 17 日 第 3 回学習会を開催しました。参加者の感想を紹介します。

・佐々木さんの一つ一つの言葉やエピソードが、心に残りました。一つは「自立」という言葉の捉え方です。佐々木さんが「自立とは依存先を増やすこと」（東京大学・熊谷晋一郎さんの言葉）ということを紹介していて、私にとって新しい視点でした。二つめは、「選択肢の辛さ」についてです。「選択肢（通常学級・学校と支援学級・学校）の行き先がそれぞれ違う」 と言われていて、そのことに共感したし、課題だと思いました。

・障害のある子どもたちだけでなく、いろいろな子も含めてのインクルーシブ教育なんだということ、しかし、その教育の利点を論議することは不毛なことだということなど、目からウロコの話を聞くことができ、本当に勉強になりました。保護者の方への声かけの仕方など、教えてもらったことも参考になりました。先生たちの意識もいっしょに変えていけるように、自分自身勉強をして伝えていきたいです。

・一人一人がもつ内面にある差別性が少しでも減っていけるような社会を目指していくべきだと感じました。「分かりあうペースはそれぞれ違う」という話があったように、人は関わりの中で考えを変えていくのだと改めて感じ、だからこそ、共に過ごす環境を子どもたちに与えていきたいと思いました。普通学級が変わる時代、いろんな区切り（支援学校・学級）がインクルーシブに適したものになるといい、していかないといけない、と思いました。

・とても心温まる話でした。佐々木さんが、自分のことを「差別者」と何度も言われたことが、心に残りました。子どもたちから気づかされた学びだと思います。自分の学校では、毎年4月に確認事項を伝えています。（支援学級の児童も）交流学級で給食を食べる、名簿も名前順で入れるなど少しずつ変わってきました。まだ、インクルーシブには遠いが少しずつ変えていきたい、もっと保護者ともつながっていきたいと思いました。とても勇気をいただけるお話でした。

・交流学級で受け入れる担任の人権感覚や特別支援教育への造詣の違いで、支援学級の子どもたちが共に学び共に生きることがうまくできるかどうかが、大きく変わると改めて思いました。

・「内面にある差別性」のお話を聞き、ドキッとしました。受け持っている A さんが交流学級に行くと冷たい視線や態度を目の当たりにして、私が A さんを交流学級から分離することをしてしまいました。お話を聞きながら、今年度の4月からやり直せるなら「こんなことができたんじゃないか」と、具体的な方法が思い浮かんできました。

ランタンフェスティバル開催中の学年末にさしかかる土曜日でしたが、佐々木サミュエルズ純子さん（大阪市　わくわく育ちあいの会）の講演会、座談会で、たくさんのことを学び、お互いの実践や悩みについて交流することができました。

『選ばせないで。選択肢があると選ばせられる。その時点では、子どもは選べない。だから親の選択になる。親と子の意思が必ず一緒とは限らない。何も考えなくても、普通に地域の学校に当たり前に入学させてほしい。』

『先生たちへ、保護者に言ってほしいことは、「一緒に悩みませんか。」の言葉。入学前に、トイレの自立や歩行の具合についてのみ聞かれると、「この学校は無理ですよ。」と言われるように感じてしまう。その前に「お子さんが安心して学校生活ができるように聞くのですが。」と一言付け加えてほしい。』など、保護者の学校に対する思いやモヤモヤした気持ちも知ることができました。

最後に、講演でもふれられた東洋大学の一木玲子さんの講演『障害者権利条約　国連審査を読み解く　日本に課せられた課題』からの言葉を紹介します。

「インクルーシブ教育の利点を論議することは、奴隷制の廃止やアパルトヘイトの賛否を問うことと同様である」「インクルーシブ教育とは、結果ではなくプロセスである」（Helen Clark）

講演の副題は「『ともに学び　ともに育つ』は全ての人のたからもの」でした。24 年度も学習会を開催します。これからも、共に学び続けましょう。